

世界の伝え方

独りよがりの報告で終わらせないために



世界の伝え方

独りよがりの報告で終わらせないために

- 0 はじめに
- 1 相手を知ろう
- 2 自分を知ろう
- 3 活動の整理をしよう
- 4 話を作ろう
- 5 アップデートし続けよう（発見は帰国後にこそある）
- 6 おわりに

0 はじめに

海外での活動を終えて、「自分の経験を伝えたい、あるいは伝えなければいけないけれどその方法がわからない」「せっかく人に話すんだからできるだけ効果的に話がしたい」などといった声に応えるために海外経験という特殊な体験の伝え方についてまとめました。

前半の三章で心構えや基本的な考え方について少し詳細に、後半は具体的な話の内容の作り方についてシンプルにまとめています。

ここにあることはこれまでの現場の経験に基づいた内容ですので、絶対的な話ではなくヒントとしてあなたらしい話し方、伝え方を模索する時の一助としていただければ幸いです。

1 相手を知ろう

例えば「世界の話をしてください」という依頼が学校や団体からあったとして、相手はどういうつもりで声をかけているか考えてみてください。声をかけてくれるぐらいだから興味があるんだろうと考える人も多いと思いますが、**興味がないから依頼をされている**ケースも非常に多いのが実情です。本当に強い興味関心がある依頼元であれば自前で実施するはずですよ。つまり、少なくとも並々ならぬ興味関心を持って依頼されることはまず稀です。

もちろん「子どもの視野を広げたい」「これからの時代は世界のことを子どもに教えない」といったポジティブな想いで声をかけていただけるケースもありますが、その場合でも根底には「やらないといけない」という義務感から来ている場合が多く、「よくわからないから代わりに話をしてほしいな」というのがホンネとしてあることも少なくはありません。

このような話をすると海外でのボランティア活動などを終えて帰国した人や、国際協力や国際交流などに深く関心を持っている人から「そんなことはない！ひと昔前に比べて関心を持っている人は増えている！」なんてお叱りを受けることがあります。果たしてそうでしょうか。そのような考えが出てくる理由として**SNSが多大な影響を与えている**と考えています。試しに、手持ちの端末で自分のFacebookやTwitterなどのタイムラインを見てみてください。おそらく、これを読んでいるような海外経験のある皆さんのタイムライン上には様々な国の文字や写真が並んでいます。そして、日本語で書いてあるものだったとしても内容は国際的な話だったり、やたらと国際問題などについてのニュース記事のシェアだったりしていませんか。世間の考えが変わったのではなく、自分の交友関係に変化があったと考えるのが自然ではないでしょうか。嘘だと思ったら、国際的なことに全く関心のない友達などをお願いしてSNSのタイムラインなどをのぞかせてもらうといいでしょう。そこに広がるのが多数派の意見で、“一般的”な世の中の関心に近いと思ってもらって大差はないはずです。SNSがその特性として**あなたが関心を持っている情報を際限なく集めてくるツール**だということをしっかり自覚しておくことで認識違いによる事故は防げるはずです。

ここで大切なのは聞き手が国際的な話題に興味を持っていないからいいとか、悪いとかということではありません。聞き手には聞き手の問題意識や課題意識があり、その方向性が違うだけだと捉えてください。ただ、押さえておきたいのは相手がこの分野に興味を持っていないということは**この分野についてほとんど何も「知らない」**という点です。知らない人に話すんだという意識をしっかりと持たないと退屈な話になってしまいがちです。例えば、突然目の前に自分の知らない分野の研究者が現れて、全く関心のない専門的な話をされたらあなたは感じるのでしょうか。外国の話をする日本ですときにはそれに近いような問題が常にあるということを頭の片隅に置いておくといいでしょう。

また、もう一つ抑えておきたいのが**依頼をしてくる人と実際の聞き手の間にもニーズのギャップがある**ということです。例えば、学校からの依頼であった場合、先生が依頼をしてきて、聞くのはその児童生徒であるというケースがほとんどでしょう。この場合には、上で述べたような注意点に加えて二重で考えておくべきことがあります。

参考までに、学校からの依頼は具体的には「日本の国際協力/ODAについての説明をしてほしい」「将来的に職業や進学先を選ぶ上での選択肢を増やしてほしい」「海外の出来事に関心を持ってほしい」といったものが多いです。

一番目に挙げた＜ODAについての話をしてほしい＞といった類の申込書を送ってこれることは意外に多く、それを真に受けて実際に学校でODAの話なんかをクソ真面目に始めると**大惨事が待っています**。先生も含めて、ほとんどの児童生徒が10分も経たずに昇天していくのが見られるでしょう。この種の依頼がくる背景にはあくまで海外での活動経験のある人に学校で話をしてほしいというのが先にあって、申し込みをする時に、「何か理由を書かないといけないのでとりあえずそれっぽいことを書かなくては…、ええいっ！＜ODAについての話＞って書いとけばいいやろ！」と担当者がとりあえず**それっぽいことを便宜的に書いた**というパターンが大半です。実際に学校などに「具体的にどんな話をしましょうか」といった問い合わせを事前に入れると解決します。大抵は、上にすでに挙げた「将来的に職業や進学先を選ぶ上での選択肢を増やしてほしい」「海外の出来事に関心を持ってほしい」に近いことを言われます。要するに**終了後に「児童生徒の考え方や価値観が変わった」といった成果を求めている**のです。

さて、ここまでで依頼元である先生側の思いはある程度理解ができたと思いますが、実際の聞き手である児童生徒のニーズはどうでしょうか。もちろん個人差はあるでしょうが、**彼らの求めているのは「新鮮さ」と「面白さ」**だと思います。いつもの先生じゃない、外部講師の話。しかも、どうやら海外から帰ってきたらしい。となったら日ごろ聞けない話が聞けるんじゃないかと期待するのは自然ですよね。そして、ゲラゲラ笑えるような面白さはもちろんですが、好奇心を満たしてくれるという知的な面白さも含めた話を求めているのではないのでしょうか。

この少しの**ズレを意識しながら汲み取るような話をする**ことが求められていて、それこそが話し手の仕事なのです。

2 自分を知らう

人前で話をする上で相手のことを考えることと同じくらい大切なのは自分についての分析です。自分の立ち位置についてはっきりと理解しているかしていないかであなたの言葉選びが大きく変わります。そして、**言葉が変わると伝わり方も大きく変わります。**

まず、最初にはっきりさせておきたいのは、あなたが特殊な人間だということです。もっと聞き手目線で歯に衣着せずに言う「おかしなやつ」だし、いわゆる「違う種類の人間」です。もし良いように表現するとしたら「自分には出来そうもないことをしているスゴイやつ」と言えるかもしれないし、「キラキラしたリア充」かもしれません。どんな表現をするにせよ、**話し手であるあなたと、聞き手である子どもや先生などとの距離はかなり離れていて、大きな壁がある**という自覚は必要です。

この壁についての意識をせずに話をすれば、どれほど話が上手くても、何度笑いが取れたとしても終わった後にはほとんど何も残りません。**テレビを見ていて大きく共感したとしても、数日したら全て忘れてしまうのと同じです。**この壁の存在を強く意識して、それを破るための工夫をすることで聞き手に当事者意識が生まれ、あなたの話が終わった後も世界の出来事をジブンゴトとして捉えることができるはずです。

また、これもよくあるミスですが、**自分が行った国の話をしに行くのだ**という自覚を忘れてはいけません。海外での生活を終えてすぐにありがちですが、気分が大きくなりまるで**世界の全てを知ったかのような感覚に支配される**ことも少なくはありません。あなたがよく知っているのはとある国の、さらにとある地域に過ぎないという自覚をここでしっかりと持ちましょう。日本国内で考えても自分の出身地や生活したことのある地域など、ごくごく狭いエリア以外のことはあまり知らなかった、答えられなかったということは、おそらく海外で生活をする上で日本について尋ねられるたびに身にしみてわかったと思いますので、その時のことをしっかりと思い出してもらうといいでしょう。

3 活動の整理をしよう

さて、あなたは海外での活動で何を感じ、何を考えてきたのでしょうか。十分な整理はできていますか。話をするにあたって、あなたの中で**活動の振り返りが十分でない場合、聞き手にあなたの言葉は伝わりません。**

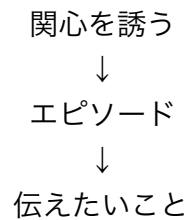
このような話をしていると決まって出てくるのが、「そんなに白黒をつけないといけないのか」「答えなんて出せない問いもたくさんあるじゃないか」という意見です。これについては**「まだ答えが出ていないけれど考え続けている」というのも立派な考え**だと胸を張って主張しましょう。＜答えが出ない＞と、きっちり整理ができていればそれでいいのです。

それでは、自分の活動の振り返り、考えを整理する上で最適な方法をここで紹介します。それは、人に話すことです。例えば電話をしてみるのもいいでしょう、飲みに行くのもいいでしょう。多くの人に会って、そして自分の経験を吐き出してください。その時に、相手の反応をしっかりと見て、ウケる話、ウケない話を整理していきましょう。この時に、注意してほしいのは会話をしている相手はどう言った立場の人かということです。すでにSNSについての話を通じて述べましたが、一般的に私たちは**自分の関心の中でコミュニティをつくりがち**ですし、ともすれば考えることもその枠の中だけでしてしまいます。あなたが誰にでもウケると思っている話がもしかしたら（内輪だけの）誰にでもウケる話である可能性があるかと認識しましょう。内輪で盛り上がるだけのネタ話で済めばいいですが、それが悪化すると**自分の意見を正当化したいだけのポジショントーク**に移行してしまう可能性を秘めています。一方的な価値観を押し付けられるほど聞き手にとって不快なことはありません。そのような状況に陥ることを避けるための簡単な方法は、いろんなコミュニティに顔を出して話をしてみることです。例えば、あなたが大量消費は良くないと思っているのであれば、大企業でバンバン商品売っている友達を探して話をしてみるといいかもしれませんし、エネルギー問題について考えることがあるなら、自分と対極の意見を持つ人と話をしてみたら新しい気づきが得られるでしょう。なかなか人に会うのが難しい人は本を読んでみるのもいいでしょう。自分がある種の考えを持ち始めたと思ったら**その逆を言っている本**を見つけてきて読んでみると、一見遠回りをしているように感じるかもしれませんが、より自分の考えを整理することに貢献してくれるはずです。

ある程度、自分の活動の整理が終わってスッキリし始めたら、今度は自分の気づきの中で伝えたいことを絞り込みましょう。おそらく、あなたが自由に使える時間は長くても2時間、大抵は90分から45分程度の時間しかありません。活動の整理をしながら思いが高まってきて、あれも伝えたいこれも伝えたいという気持ちはわかりますが、限られた時間できちんと伝えるために、**多くても2つ、できれば1つ**に絞り込みましょう。その方が聞き手には響きますし、残ります。

4 話を作ろう

<相手><自分><活動>の整理が無事にできたら、話を作りましょう。プレゼンによほど慣れないうちは、**型にはめて話をする**のがオススメです。ここでは、以下のような型をご紹介します。



関心を誘うためのヒントとして、ここでは二つ挙げます。

それは<追体験>と<時事ネタ>です。この二つは比較的誰にでも用意しやすく、相手もそこまで選びません。

一つ目の追体験ですが、話をする時に聞き手が**話し手の体験に同調**できるように仕掛けることでスムーズに話に入り込ませることができます。そして自然な形で話を耳にすることができるのでジブンゴトとして受け止めやすくなります。追体験のさせ方は色々ありますが、最も簡単なのは自分が聞き手の年齢だった頃の話から始めて、どのような流れで今に至っているかを話すといいでしょう。あるいは自分の体験のある時点を起点にしてその時の自分の感情を紹介したり、あるいはその時に自分ならどうするかを想像させるなどという手法もあります。

もう一つは時事ネタを活用することです。例えば大きなイベント（オリンピックやワールドカップなど）があればそれに合わせて話をするといいかもしれませんし、事件（テロや災害など）があればそこを切り口に話をすることもできるでしょう。こちらの場合も聞き手が元々関心を持っているテーマであれば、抵抗感なく話に聞き入ることができます。ただし、この場合は聞き手の**関心の度合いにばらつきがある**ことが予想されるので、ある程度話し手にスキルがないと失敗することもあります。

エピソードについては、最後のメッセージにどのようにつながるかという観点で選びましょう。あれも話したい、これも話したいという気持ちはわかりますが、ここではそう言った気持ちを断ち切って断捨離をすることが大切です。泣く泣く切り捨てたエピソードについては話が終わった後の質疑の時間や、余った時間などで余裕があれば披露するといいいでしょう。

伝えたいことは、極限まで絞り込みましょう。ここをしっかりと絞り込まなければ、上のエピソードが絞り込めません。一番、自分のオリジナリティーが発揮できる部分です。

エピソードと伝えたいことの詳細について具体的には述べることは、自由な発想を妨げてしまう可能性があるので控えておきますが、<聞き手>である相手と、<話し手>である自分についてしっかりと分析ができていれば、自ずとしっかりとした内容になるはずです。

5 アップデートし続けよう

(発見は帰国後にこそある)

生涯に1000編以上の短編小説を書きショートショート之神様と呼ばれた星新一さんは、地域・社会環境・時代に関係なく読めるように工夫して作品作りをしていたそうで、晩年は自分の作品の中で時代にそぐわない表現を**手直しし続けた**ことが知られています。

(例えば「ダイヤルを回す」と書いていたものを「電話をかける」に変更するなど)

これは、私たちの経験についても同じく大切な姿勢ではないでしょうか。外国での生活を経て日本に帰ってきたその瞬間のメッセージと数年後のメッセージはおそらく違いますよね。数年も待たなくても、おそらく人前で話をする中でも大きく自分の中の考えは深化するはずですし、日常生活の中でのちょっとした気づきもあるはずです。ということは真剣に自分の経験と向き合えば、たとえ短い期間であったとしても**同じ話にはできないはず**です。

海外での生活を通じてみなさんの目は開かれているはずです。その目で見つめると、毎日の出来事からも多くの隠れたネタ見えてくるはずですので、それを探しながら生活をする習慣を身につけましょう。

以下にヒントとして、いくつか画像に合わせてコメントを挙げておきます。

<得たものと失ったもの>

イルミネーション (博多駅)



星空 (ミクロネシア連邦)



写真：Kohtaro Uchiyama

電気の無い世界は真っ暗なのか？

水は雨水、電気はないなどといったエピソードと合わせて挟むと考えるきっかけになります。

<流行の理由を考える/既存のものとの類似点>

ポケモンGO（ポケモン図鑑）



アフリカの動物（動物図鑑）



画像：Private Zoo Garden

ポケモンGOの中の多種多様なポケモン、アフリカの多種多様な動物たち。話の膨らませ方は色々考えられそうです。実際の大自然の写真を持っていたらそれを使いましょう。

<日本で当たり前になりつつあること>

公園の看板（ボール遊び禁止）



写真：livedoor.blogimg.jp

公園って何のための場所だったんだろう。公園でボール遊びを禁止される日本の子ども、泥まみれで怪我をして帰って来る現地の子ども。どっちがいいかな？

木に登る子ども（4才ぐらい）



6 おわりに

ここまで準備段階の大切さや、話の組み立て方など細かい話をしてきましたが、一番大切なことについては触れてきませんでした。

一番大切なことは「話す国に対するあなたの思い」です。話の上手い下手はもちろん個人差があります。ただ、どんなに話が下手だったとしてもあなたが思いを込めていればその思いは聞き手に伝わります。誰かと話をしている時に、「この人この話題にはアツいな」と感じたことはありませんか。安易な発想かもしれませんが、自分が行ったこともない、あるいはこれまで聞いたこともなかったような国のことをこんなに好きな人がいるんだ、世界は面白そうだなということが伝わればいつの日か聞いている人が外に出て行くきっかけになるかもしれませんよね。あなたに期待されているのはそこにあると言っても過言ではないでしょう。

もし、実施するにあたって不安な部分や具体的なアドバイスが欲しい場合は遠慮なく「学校から世界のミカタを考える会」にコンタクトを取ってみてください。できる範囲でのサポートはさせていただきますし、日程の調整がつけばこの資料の内容についてのセミナー・ワークショップや、実際の体験談のデモンストレーションなどの依頼も受けております。

最後になりましたが、世界の伝え方についてまとめるにあたってご助言をいただいた方に心より感謝いたします。ありがとうございました。また、あなたの体験談が成功することをお祈りしております。

※本冊子に関して、ご意見やお気づきのことがございましたらご連絡をお待ちしております。

※無断複製・転載・配布はご遠慮ください。希望する場合は、下記メールアドレス宛にご一報ください。

編集／発行

学校から世界のミカタを考える会

E-Mail : koji.sekainomikata@gmail.com

<http://sekai-no-mikata.jimdo.com/>

<https://www.facebook.com/sekainomikata/>